

---

[成果情報名] イチゴ「あまおう」高設栽培の遮光による増収効果と適正なかん水管理

[要約] イチゴ「あまおう」の高設栽培による早期作型では、定植後に遮光すると、2月の収量が増加する。遮光に加えて、培土を pF2.0 でかん水管理すると、販売単価の高い年内収量と 11～5月の総収量が多くなる。

[キーワード] イチゴ、あまおう、高設栽培、遮光、pF、収量

[担当部署] 豊前分場・野菜水田作チーム

[連絡先] 0930-23-0163

[対象作物] 野菜

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

---

[背景・ねらい]

イチゴ「あまおう」の早期作型では、定植後の生育が旺盛になると、第1次腋果房の花芽分化が遅れ、2月の出荷量が減少する。そのため、定植後の遮光処理やかん水制限によって花芽分化を誘導している。しかし、株当たり培土量が少ない高設栽培では、遮光処理の効果や適正なかん水管理が明らかでない。

そこで、高設栽培の低温暗黒処理による早期作型において、2月増収のための定植後の遮光処理の効果とかん水管理を明らかにする。

(要望機関名：生産流通課、飯塚・八女普 (H17))

[成果の内容・特徴]

1. 高設栽培の早期作型では、定植後に 40～50%遮光すると遮光しない場合に比べて、年内収量が減少傾向となり4月の収量も少なくなるが、2月の収量が増加し総収量は同等である(図1、表1)。
2. 遮光して培土の pF 値を 1.5～2.2 でかん水管理した場合、1～5月の収量に明確な差はないが、pF2.0 では pF2.2 に比べて、販売単価の高い年内収量が多く総収量は同等で、pF1.5 よりも総収量が多くなる(表1、一部データ略)。

[成果の活用面・留意点]

1. 「あまおう」栽培の手引きに登載し、高設栽培における第1次腋果房の花芽分化促進法として活用する。
2. 遮光は、定植後から10月中旬まで遮光率 40～50%の黒寒冷紗(#600)を被覆する。
3. かん水管理の培土 pF 値の測定は、テンションメーターを設置する。
4. 高設栽培は、ピートモス、ヤシガラピート等の有機質培土(アグリス)に、基肥としてエコロング 424 を施用したダブルベリーラックコンテナ式高設(矢崎化工)である。

[具体的データ]

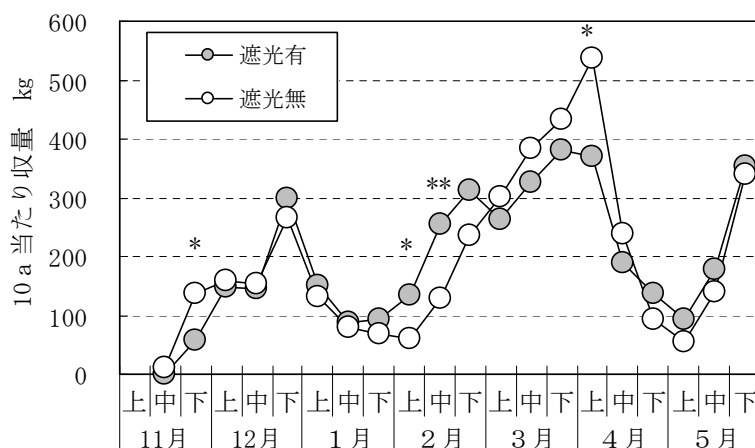


図1 遮光処理の有無と月旬別収量（平成21～22年度）

- 注) 1. 平成21年9月15日定植と平成22年9月16日定植の2か年の平均値。  
 2. 収量は可販果のみ、10a当たり7,425株で計算。  
 3. t検定により、\*\*は1%水準、\*は5%水準で有意差あり。

表1 遮光処理の有無、かん水管理の違いと収量（平成21～22年度）

遮光処理	かん水管理	10a当たり収量			総収量 (kg)
		11～12月 (kg)	1～2月 (kg)	3～5月 (kg)	
有	pF1.5	670 b	980 a	2,130 b	3,780 b
	pF2.0	700 ab	1,020 a	2,310 ab	4,030 a
	pF2.2	570 c	1,100 a	2,430 ab	4,100 a
無	pF1.5	740 ab	600 b	2,430 ab	3,770 b
	pF2.0	770 a	610 b	2,620 a	4,000 a
	pF2.2	670 b	890 ab	2,510 ab	4,070 a
遮光処理		**	**	**	ns
かん水管理		**	**	ns	**
交互作用		ns	*	ns	ns

- 注) 1. 平成21年9月15日定植と平成22年9月16日定植の2か年の平均値。  
 2. かん水管理は、10月1～21日の9、13、16時に、テンションメーターで条間の地下5cmの培土pF値を測定し、設定値を超えた場合、株当たり100mlをかん水。  
 3. 収量は可販果のみ、10a当たり7,425株で計算。  
 4. 分散分析により、\*\*は1%水準、\*は5%水準で有意差あり、nsは有意差なし、アルファベットは、Bonferoni/Dunn法により、5%水準で異文字間に有意差あり。

[その他]

研究課題名：イチゴ高設栽培のかん水制限による安定生産技術の確立

予算区分：経常

研究期間：平成22年度（平成21～22年）

研究担当者：田中良幸、姫野修一、林田達也